相模経済新聞　2019年10月10日号

宇宙生命哲学 ことはじめ 18

北里環境科学センター
名誉顧問／宇宙生命哲学者
伊藤 俊洋

16歳の少女グレタさんの叫び

国連の温暖化対策サミットで、スエーデンの16歳の活動家、グレタ・トゥーンベリさんが、各国の代表を前に歴史的な演説をした。グレタさんの演説の要旨は以下の通りである。

『各国の代表者は、若者に希望を見出そうとこの場に集まっているが、実質は空虚な言葉で私の子供時代の夢を奪い、お金のことや、経済成長のことばかり話している。表面的には地球環境のことを考えているふりをしているが、実際には自国最優先で、地球全体の環境問題に全く対応していない。すでに、30年も前に地球温暖化の問題が科学的に指摘されていたにもかかわらず、政治家たちはそれを無視して、経済最優先の政策をとり続けてきた。先進国の人達はまだ恵まれているが、発展途上国の人々は苦しんでいるし、多くの国では環境問題で人々が死んでいる。生態系は崩壊しつつあり、今、私たちは新たな生物大量絶滅の始まりにいる。

環境活動家グレタ・E・トゥーンベリさん（2019. 9. 23. ニューヨーク国連気候行動サミットで/ロイター）

科学的根拠を元に、地球環境の二酸化炭素濃度の上昇と気候変動の危機的状況が算出されても、大人たちは、緊急性を理解していると言いながら、根本的な対応策や解決策を計画しようともしない。大人たちは、自分たちの生きている時代のことではないと思い、真剣に取り組んでいない。それは、大人たちの、若者やこれから生まれてくる子供達への裏切りである。これからも裏切りを続けるなら、若者たちは絶対に大人たちを許さない。世界中の若者たちは、目を覚ましており、力を持っている。大人たちが好むと好まざるとにかかわらず、私たちは行動する』

グレタさんの発想の根底には、「宇宙生命哲学」の思想が色濃く息づいている様に思える。地球環境を宇宙船地球号と捉え、環境問題を国レベルから地球レベルにまで引き上げて、生態系への影響を考慮して、生命大量絶滅の危機に警鐘を鳴らしている。

人類は、自分の世代の幸せだけに満足するのでなく、次世代、さらに先の世代の人々が全ての生物とともに豊かな生命世界を生きて行くことを考えて行動するべきである。若者たちは、環境問題を、時空を超えたミッションと考え始めている。彼らは、目先の贅沢な生活に関心をもつのではなく、地球全体の環境がバランスよく保たれることに、生きがいを見出しつつあるのではないかと思う。